

朝河貫一の図書収集と早稲田大学図書館

——市島春城への書簡を参考として——

藤原秀之

はじめに

近年の朝河貫一研究は、イェール大学が所蔵する“*Asakawa Papers*”による伝記的なアプローチ、さらには朝河の業績に関する詳細な調査、研究が盛んである。その中で、朝河の日本語図書収集についても、コレクション全体の研究や京都古文書に関する具体的な調査など、大きな進展がみられる。特に第一回帰国時（一九〇六—一九〇七年）の図書収集については、松谷有美子氏による一連の研究⁽³⁾により、日本図書館界への影響も含めて多くが明らかにされてきた。本稿では、それら既存の研究成果に依りながら、朝河が、その母校である早稲田大学の図書館長であった市島謙吉（春城）にあてた書簡などを手掛かりに、朝河の日本語図書収集および早稲田大学図書館の蔵書構築に朝河が果たした役割について考えてみたい。なお、ここで紹介する朝河貫一書簡（市島春城宛）二通は早稲田大学図書館がかねて所蔵していたものだが、既刊の『朝河貫一書簡集』⁽⁴⁾（以下、『書簡集』とする）などでも紹介されたことのない、その意味では新出資料である。これらの書簡に加え、市島の遺した筆録、日記なども参照しながら検討を進め、早稲田大学図書館所蔵の市島宛朝河書簡についてはその全文（付属資料含む）の翻刻を掲げることとする。

1. 朝河の日本語図書収集の概要

朝河貫一は一八七三年（明治六）に福島県二本松に生まれ、一八九二年（明治二五）年東京専門学校文学科に入学、その後坪内逍遙、大西祝らの教えを受け、一八九五年（明治二八）、優秀な成績で卒業したという。⁵ 当時文学科は創設間もない時期で、市島は当時の様子を次のように述べている。

金子（馬治）、水谷（弓彦）などいふ面々は皆第一期生で、島村（瀧太郎）、後藤（寅之助）、中島（半次郎）が第二期、五十嵐（力）、綱島（栄一郎）、朝河（貫一）三氏などが第三期生である。当時卒業の場合には卒業論文を課したが、流石に其の頃の論文は立派なもので、金子、朝河、島村の卒業論文の如きはいづれも堂々たるものであつたと坪内君は語られた。⁶

卒業後、朝河はアメリカに留学し、ダートマス大学に入学、一八九九年にはイエール大学大学院歴史学科に進学し、翌年同大学の図書館で日本資料整理のアルバイトをはじめたという。そして一九〇二年『大化改新』⁷で博士号を取得、ダートマス大学の講師となった。一九〇六年一月、イエール大学図書館長のシュワブ (J. C. Schwab) に日本語図書収集の必要性を訴える書簡を送り、そうした活動が受け入れられ、イエール大学およびアメリカ議会図書館（以下LCとする）から日本での日本資料収集を委託され、同年二月、第一回目の帰国を果たし、翌年八月までの間、日本語図書収集活動が続けることとなる。

この時の成果はLCに対し三二六〇種四万五〇〇〇冊（洋装再製本・九〇七二冊）、イエール大学には八一二〇種二万一二〇冊（洋装再製本・三五七八冊）などであった。⁸ 朝河の収書活動については両図書館の報告書にもまとめられているので、それらを参照しながら収書方針や具体的な行動を確認しておこう。⁹

まずLCについてだが、一九〇六年一月、図書館長のパトナム⁽¹⁰⁾から日本資料の収集を依頼され、購入のための予算として五千ドルを示されたという。

さらに一九〇七年のLC図書館長年次報告⁽¹¹⁾に、朝河自身の言葉とともに収書活動の詳細が記されている。イエール、LC双方の依頼を受けた朝河は、大学図書館にとって有用な資料、さらにはLCに必要な幅広い分野の資料収集に尽力した。具体的には『国書刊行会叢書』などの新刊書や、古書店などを通じて収集した資料原本、彼自身が写字生を雇って作成した写本などについて収集の経緯を述べている。また収集した資料の多くが和装本だったため、そのままではアメリカの図書館で保存する際には不便であり、収蔵スペースも多く必要となると考え、芸術的などの理由から原装を残すべきと判断した場合を除いて洋装本に再製本したとしている。さらには収書の方針として、他に代わるものがない、いわゆる天下の孤本のような重要な資料について日本から持ち出すことはしないなど、単に稀少であるというだけの理由で資料収集はしないことを原則としていた。こうした考えから一旦は朝河の手に渡った資料のうち日本に残したものととして、「台密派の著名な仏教徒の日記である『幽明日記』」(Yumei-Nikki, a famous Buddhist diary of the Daimitsu school) と「一五七三年の年記を持つ京都の興味深い資料」(an interesting document of the city of Kyoto, dated 1573) をあげ、最終的にはどちらも早稲田大学図書館に収蔵されることとなったとしているが、後述するようにこれらの資料はたしかに現在同館に収蔵されており、特に京都関係の資料については朝河からの領収書が図書館に残されている。結果として朝河の収書により日本の文学や歴史学などを学ぶ学生たちのために優れた実用的なコレクションがアメリカの図書館に備えられることとなった。

またイエール大学図書館長年次報告⁽¹²⁾によれば、イエールの図書館にはそれまでに一三五一冊に再製本した七一七種の日本コレクションがあったが、朝河による収集の結果、八二一〇種(三五七八冊に再製本)、一七四一点の地図資料、

七四二点の写真や図表、その他いくつもの巻物が追加されることとなった。これらのコレクションは二種類に大別でき、一つが当時の日本の状況を伝える資料であり、日本政府、各省庁の協力により一七〇〇種を超える地図資料等が収集された。もう一方、こちらが新収資料の多くを占めることになったが、日本のさまざまな歴史的資料群であった。朝河が収集したこれらの資料はあらゆる時代の歴史的、文学的な内容を含むもので、日本国内のコレクションと比べても大規模なものであった。

朝河からの報告を踏まえ、LC、イェール大学双方の図書館は以上のような形でその収書活動についてまとめていく。

それではこの収書活動に、朝河の母校である早稲田大学、およびその図書館がどのようにかかわっていたのか、とりわけ当時図書館長であった市島春城との関係を中心に節を改めて確認してゆくことにする。

2. 朝河の第一回帰国当時の早稲田大学図書館

一九〇六年（明治三九）二月十六日に横浜港に着いた朝河は、二本松への帰郷などを経た後、三月七日から本格的な収集活動をはじめた。この頃イェール大学図書館長シユワブに宛てた書簡によれば、早稲田大学図書館を訪問した朝河は、そこにオフィスと収集資料の保管場所を提供してもらったという。⁽¹³⁾

たしかに当時の図書館長である市島春城の日誌をみると、以下の記述があることがわかる。まず帰国直後の二月十九日、二本松への帰郷より前に市島のもとを訪れている。日誌には、

校友朝川貫一^{マツ}洋行中の処帰朝、本日会談す、

とある。⁽¹⁴⁾これ以前に朝河から市島に対して書簡等を通じた接触の有無は今のところ不明だが、ここではあくまでも「校

友」の一人として紹介されている。⁽¹⁵⁾さらに収書活動が本格化した三月二〇日には、

早朝、朝河貫一、図書蒐集の件二付来話、

とあり、⁽¹⁶⁾朝河と市島との間で図書収集についての打合せがあったことがわかる。後述するように他にもこの時期の市島の日誌に朝河にかかわる記載はあるが、シユワブ宛書簡にあるというオフィスや収蔵スペースを提供したことには触れられていない。朝河の訪問を市島はどのように受け入れたのか、現状確認できる資料の中で見てゆくことにしよう。

東京専門学校は一九〇二年（明治三五）に早稲田大学と改称したが、それにあわせて図書館を新築している。創立から二〇年、それまでは講義棟や大講堂など他施設と共用だった図書館だったが、これを期に煉瓦造三階建の書庫と木造二階建の閲覧室からなる図書館棟がはじめて建設されたのである。⁽¹⁷⁾同年十月の開館を前に市島が館長となり、八月から正式に勤務をはじめ、新図書館の設備や図書館運営に関する知識の吸収と実務に積極的にあたっている。⁽¹⁸⁾館長就任を依頼されるまで図書館業務に関わっていなかった市島であったが、⁽¹⁹⁾八月一日の午後には大橋図書館を訪問、同館の岸上質軒から説明を受け、⁽²⁰⁾翌日は上野の帝国図書館に田中稲城館長を訪ね、図書管理法について協議するとともに同館の書庫を見学している。また同月六日には坪内逍遙と和漢書目録修正について協議、十二日からは書架設計について担当技師らと協議を繰り返すなど開館準備を進め、十月の開館以後も京都帝国大学図書館、大阪図書館（現・大阪府立中之島図書館）などを見学、さらにカッターやデューイの分類法を研究、カード目録を収容するカードケースの調査など、⁽²¹⁾図書館に関する知識吸収に積極的につとめており、図書館運営の責任者としての高い自覚が感じられる。また日本文庫協会の活動にも参加し、市島が図書館長となった一九〇二年、早稲田大学図書館は日本文庫協会の次期幹事校に指定されるが、翌一九〇三年八月に開かれた第一回図書館事項講習会で市島は科外講演「図書館の必要」を

おこない、十月には市島の発議により東京帝国大学附属図書館で「第一回図書展覧会」を開催、一九〇五年には田中稲城らとともに東京市通俗図書館建設計画の調査委員に指名され、そして一九〇七年には第三代の日本文庫協会会長となり、彼の在任中に「日本図書館協会」へと改名されることになる。⁽²²⁾ 朝河が市島を訪れたのは、まさにそうした新しい建物で新しい図書館が成長してゆく過程にあった早稲田大学図書館であり、市島としてはLC、イエール大学の命を受けてやってきた朝河に、日本語図書収集などで協力をする一方で、アメリカの図書館事情を中心とした多くの知識の提供を期待していたと思われる。それは単に図書館だけの問題ではなかったようで、早稲田大学は朝河に一九〇六年九月から講師（英語担当）⁽²³⁾ を依頼、さらに通常は三年任期の教授会の議員にも選出している。⁽²⁴⁾ 朝河が任期を全うするほど滞在する保証のない中での嘱任は、大学側の彼に対する期待の表れと言ってよいかもしれない。また朝河にとっても市島は、日本の図書館界との接点を作るために重要な役割を果たしたのではないだろうか。一九〇七年六月の日本文庫協会夏期例会で朝河は「図書蒐集談」という内容の講演をおこない、当時の日本文庫協会会員名簿を見ると、唯一の在外会員として記録されている。⁽²⁵⁾ さらに同年十月に開かれた全国図書館員大会の報告で市島は

報告すべきことは、外国図書館と我国図書館との間に連絡を計るの件にして、之に就ては米国エール大学講師朝河貫一氏が曩日帰朝せられたる際特に其旨を談じたるに、同氏渡米後直ちに之を彼の図書館に伝へられしより有力なる一二の図書館に於ては非常に賛成の意を表し、今後彼我図書館の間に互に其事情を通知し合ふことを好諾せし由朝河氏より来信ありたり

と述べており、市島が朝河の訪問を早稲田大学だけでなく日本国内の図書館全体にとって意義あるものとしようとしたことがわかる。⁽²⁶⁾

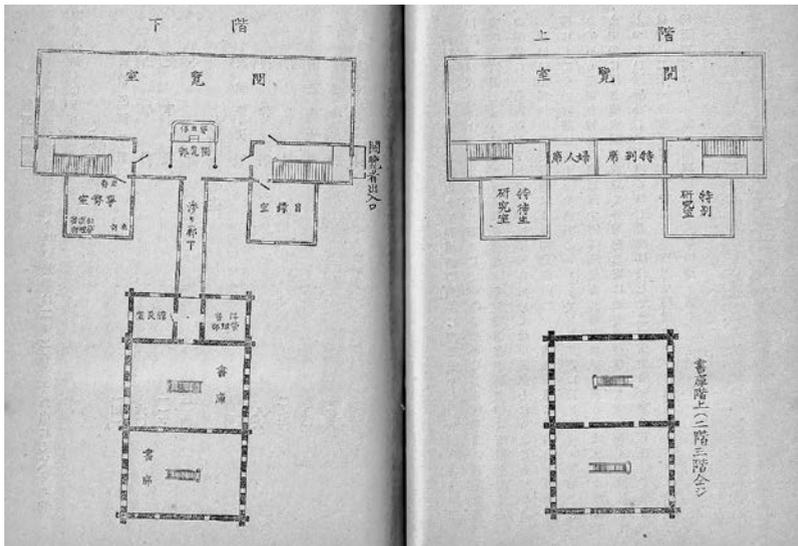
そんな朝河に対し早稲田大学図書館が館内に場所を提供したというが、それが事実であるとすればどこなのか、当

時の図書館の中で考えてみよう。別に示した図面(図版1)によれば、一九〇二年開館の早稲田大学図書館の閲覧室二階に研究室がある。ある程度まとまった作業をする空間としては、このあたりが朝河に提供されたスペースとも思われるが、今日確認できた当時の記録、帳票類にも朝河への貸与を示す記録はない。ただしCやイエール宛の報告から明らかのように市島や早稲田大学図書館が朝河の資料収集に協力したことは明らかである。そこで、次に早稲田大学図書館が所蔵する朝河貫一書簡(市島春城宛)二通と付属資料から、朝河と早稲田大学図書館の関係を確認してゆくこととする。

3. 早稲田大学図書館所蔵 朝河貫一書簡 市島春城宛

早稲田大学図書館が所蔵する市島春城宛の朝河貫一書簡は二通あり、いずれも同館が構築する「古典籍総合データベース」でその全文が公開されている。一通は他の近代諸家書簡類と共に原装のまま保管されているもので、もう一通は市島が自分宛の来簡を貼込帖にまとめた

朝河貫一の図書収集と早稲田大学図書館



図版1) 図書館平面図(1902年開館)

『廿五年紀念 早稲田大学創業録』(早稲田大学出版部、1907年)より(著者蔵)

ものに含まれている。

以下に二通の概要と全文の翻刻を掲げる。

(1) 「一九〇八年（明治四二）八月三〇日付（図版2）

〈請求記号〉又五 五九八五（三）

近代諸家書簡集（一九九二年以降収集の単品書簡）のうち

〈形態〉一枚（縦二二・六×横十四・二cm）黒ペン書

〈付属資料〉付属資料に小番号は付されていないので、便宜上、古典籍総合データベースの撮影順に並べた。現状は、

書簡本紙は①の中に、②④⑤は③の中に入っている。

①封筒（縦十八・五×横八・三cm）青ペン書、上部欠損

②郵便物受領証 「明治」四〇年八月八日付

一枚（縦九・〇×横十四・三cm）黒印刷、黒カーボン

複写

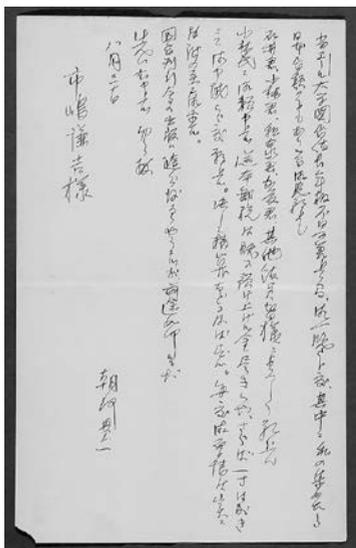
③封筒（縦一〇・〇×横二二・四cm）黒ペン書

④「朝河より預かり金支出明細」

早稲田大学図書館用箋一枚（縦二四・二×横三三・一cm、

半葉一〇行、青罫、四周子持枠、版心下部に「早稲田大

学図書館」とあり）、墨書、一部赤ペン、鉛筆書



図版2) 朝河貴一書簡

(市島春城宛 1908年8月30日 又5 5985(3))

⑤ 「朝河より預かり金支出明細 部分抜書」

一枚（縦十七・五×横十二・六cm、縦方向に一行二・一cmの幅でミシン目が入っており、全体で六行になっている）、鉛筆書

〈凡例〉

句読点、傍線は原資料のママとし、書簡本文の改行部分は／で示した。また旧字は新字にあらためた。①封筒の欠損部分は「」で示し傍注で補記、②郵便物受領証の空欄部分は省略した。

〈本文翻刻〉

当エール大学図書館長年報不日可差上候間、御一覽被下度、其中ニ私の集めたる／日本書類のこともあり候間御覽願上候／石井君、小林君、和泉君、加藤君、其他館員皆様ニよろしく願上候／小林氏ニ御頼申上候送本郵税は既に預け上げ候金尽き候や、さらば一寸はがき／にて御申越被下度願上候。決して精算などに及ばず候。毎度御厚情は実ニ／拝謝の至ニ御坐候。／国書刊行会の出版ハ随分後る、やうニ候が、前途如何候哉／先ハ右申上候 勿々拝／

八月三十日

朝河貫一

市嶋謙吉様

〈付属資料〉

①封筒（表）

〔（東京）〕市牛込区

〔（印）〕稲田大学

〔二円〕〔異筆・鉛筆書〕

図書館御中

封筒（裏）

朝河貫一の図書収集と早稲田大学図書館

下谷茅町二ノ五

佐藤方

朝河貫一

(消印) 牛込 8. 9. 5 后0—1

② 郵便物受領証 (「」部分がカーボン複写、〈〉はスタンプ)

差出人宿所氏名「早稲田大学小林堅三」

受取人宿所氏名「北米合衆国エール大学校 朝河貫一」

郵便物区別「一」

引受番号「四二五」号

郵便料「四拾銭」

日付印〈武蔵小石川雑司谷 四十年八月八日〉

③ 封筒

Dr. K. Asakawa

Yale University

New Haven Conn.

U.S.A.

④ 「朝河より預かり金支出明細」

(右欄外書込)

「Dr. K. Asakawa

Yale Uni

New Haven Conn.

U.S.A.」

八月七日夜 収入

金五円

預

八月八日 支出

金四十銭

書留料

下田歌子出の書留

岡田五兎出はがき

外国便封書

右送附

(鉛筆書)

「八月二十日

金十銭 支出

はかき二通

東亜同文会、

笈舜亮

封書二通

朝河貫一の図書収集と早稲田大学図書館

○チャイネス ヤングメンズ

クリスチアン アンシーション^(工脱)

○Bryn Mawr College.]

(11)から再び墨書)

十月三十日

金三十銭

封書四通 はかき二、

金一円九十二銭

刊行会本 五六両月分送附

十一月二十一日

書籍包五個

郵税

一円九十六銭

(赤ペン書)

「~~ノ~~四円六十八銭

三十二銭預」

⑤ 「朝河より預かり金支出明細、部分抜書」

八月二十日

はかき二本

東亜同文会、

筧舜亮

封書二通

○チアイネス ヤングメンズ

クリスチアン アンシヤシヨン

○Bryn Mawr College

〈解説〉

本書簡は早稲田大学図書館が個別に収集した近代諸家書簡の一通であり、封筒、付属資料等と共に一括で保管されている。後述するように付属資料のうち①封筒については、書簡の内容、日付との不一致があることから、別の書簡に関係するものが伝来の過程で混入したものと考えられる。

冒頭から順に内容を確認してゆく。まず朝河が収集した「日本書類」に言及している『エール大学図書館長年報』だが、これは前述のイェール大学図書館長年次報告と考えると間違いないだろう。この報告には朝河の収書活動が具体的に、詳細に記されているが、本号については朝河からの寄贈本が早稲田大学図書館に所蔵されており、その寄贈日付は一九〇八年十一月三〇日付となっている。図書館長年次報告の内容に言及し、かつ「不日可差上」とあることから考えても、本書簡が報告の刊行された一九〇八年（明治四二）のものだとということが推測される。

続いて記された四名はいずれも当時の早稲田大学図書館員で、石井君28、石井藤五郎、小林君29、和泉君30と和泉信平、加藤君28、加藤萬作である。石井藤五郎は一八九二年（明治二五）四月に東京専門学校図書室最初の専任職員となり、一九〇三年には日本文庫協会の幹事もつとめた。加藤萬作もまた一九〇一年九月に図書館員となり、石井とともに文庫協会幹事となった。小林堅三は一八九八年に東京専門学校に入学するも病を得て中退、一九〇四年五月に図書館員となり、その後は同郷の市島館長のもとで図書館以外の校務にも尽力、市島館長退任後も早稲田大学図書館主事、また日本図書館協合理事のなどの職をつとめた。本書簡によれば朝河は郵送料を小林に預けており、彼が朝

河に対する早稲田側の経理面での窓口となっていたことが推測される。和泉は市島の叔父である巖吉の息子で、市島の従弟にあたる。⁽³²⁾ 日誌によれば市島は和泉を手元に置き、私的なことも種々手伝わせていたが、市島の館長就任後に図書館員となり、一九〇七年には加藤とともに文庫協会幹事をつとめている。

さらに朝河は小林に預けた「送本郵税」の使用状況について確認している。これについては付属資料④がその内訳と考えてよいだろう。ここには朝河からの預かり金五円のうち、各方面への郵送料として四円六八銭を使用し、三二銭残っている状況だと記されている。⁽³³⁾ 明細をみるとまず書留料として四〇銭、これは日付と金額から付属資料②に対応しているとみてよいだろう。朝河が帰米したのが一九〇七年八月七日なので、その翌日の発送分だとわかる。他には東亜同文会、寛舜亮への葉書やプリンマーカレッジ宛の封書、さらには国書刊行会の配本送料、書籍小包等、同年十一月二一日までの使用分をまとめた内容となっている。朝河がアメリカに戻って一年が経過し、預けておいた送料はさすがに底をついたであろうから、そうであれば知らせてほしい、という書簡に対し、小林、あるいは市島からこれらの内容を踏まえた返書が送られたと思われる。またこの書簡から、朝河の日本国内向けの書簡等の発送の少なくとも一部について早稲田大学図書館が代行していたことがわかる。あるいは帰米の慌ただしさのなか、残務を依頼したということかもしれない。

書簡の最後は「国書刊行会の出版」すなわち『国書刊行会叢書』の刊行状況の遅れについて確認する内容となっている。国書刊行会は失われゆく古典籍を将来に残すべく大隈重信を総裁として市島らが中心となって一九〇五年に設立された。⁽³⁵⁾ 近世以前の写本、版本から選んで翻刻、出版したもので、それらは今日でも歴史、文学研究上の重要な資料として活用されている。前述のLCの報告書にもあるように『国書刊行会叢書』は朝河の収集対象となり、刊行の都度送本されていた。⁽³⁶⁾ それを市島に確認し、かつ付属資料④にあるように送付に関する記録が残っているということ

は、国書刊行会関係の送本事務についても実質的には市島の周辺でおこなわれていたことが確実と言ってよいだろう。さて他の付属資料、すなわち二点の封筒についてみておこう。まず付属資料③の英字で朝河の名が記されているのだが、おそらくこれは朝河からの書簡や関係資料をまとめるために図書館が作成したものである。そして①の朝河が差出となっている図書館宛の封筒は、消印の日付が「8・9・5」となっており、朝河の住所が「下谷茅町」となっていることから、第二回の帰国時、すなわち一九一九年（大正八）九月五日のものであろう。この年の六月、朝河は九州で入来文書の調査を行っており、七月に帰京し、九月十三日に横浜を出港している³⁷ので、時期的にもあろう。帰国を前にした朝河から図書館に送られた書簡の封筒が混入したものではないかと推測される。

以上、朝河の第一回帰国時における図書蒐集に関する市島宛書簡について確認してきた。続いて早稲田大学図書館が所蔵するもう一通の市島宛朝河貫一書簡をみておこう。

(2) 「一九一七年（大正六）」八月三十日付（図版3）

〈請求記号〉 千六 三八一三（二）

「朋盍手柬 坤」（市島春城蒐集書簡貼込帖）のうち

〈形態〉 白継紙（全体を裏打後、台紙貼込）、縦十八・三×横三三・〇cm。横二四・六cm部分に紙継あり。

〈凡例〉

適宜読点をおぎない、旧字は新字にあらためた。また／は改行部分を、レは紙継部分を示す。

〈本文翻刻〉

拝啓、

早稲田の方案外ニ込み入りて参り、／如何ニ成行くにかと学校の為にも日本／教育の為に甚懸念罷在候処、幸ニ／当座だけの片が付き候は喜ばしく存候、／されども之が為ニ多年の縁を絶つニ／至られ候御胸臆ハ、不肖ながら幾分／ハ御察申上候、只從來莫大の御貢獻ハ／事実として動かすべからず、今日よりも／後日ニ及びて一層之を人々が解得／可仕を信じ候、よつて僭越ながら一言／慰問の情を表し候也、

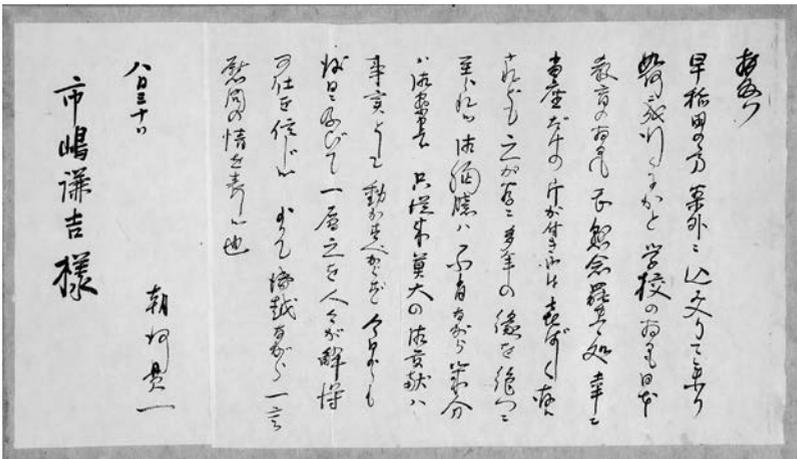
八月三十日

朝河貫一

市嶋謙吉様

〈解説〉

いわゆる「早稲田騒動」⁽³⁸⁾の結果、市島は図書館長はじめ大学内の要職を辞することとなった。それを知った朝河が、市島の早稲田大学に対すこれまでの尽力を慰労する書簡である。本書簡を受領した春城は朝河に返書を送ったことを日誌に記している。⁽³⁹⁾当時朝河は二度目の帰国中であり、早稲田騒動については早くから耳にしていたようで、東京専門学校在学時の師である坪内逍遙との間で交わされた書簡からも学内情勢について気にかけていたことがわかる。⁽⁴⁰⁾



図版 3) 朝河貫一書簡 (市島春城宛 1917年 8月30日 子6 3813 2)

以上が早稲田大学図書館が所蔵する二通の朝河から市島に宛てた書簡の全容である。ここからは朝河と早稲田大学図書館等との関係を次の三つの視点から確認する。すなわち、寄贈、購入、そして国書刊行会との関係である。

4. 朝河の資料収集と早稲田大学図書館

最初に朝河から早稲田への図書等の寄贈については、前述した『イェール大学図書館長年報』の他にも早稲田大学図書館への寄贈図書があったことがわかる。まず自身の著作について少なくとも以下の二点が朝河から寄贈されている。一点が“The Russo-Japanese Conflict: its causes and issues”⁽⁴¹⁾である。朝河は日露戦争のさなかに刊行した本書を寄贈、大学は「時節柄極めて興味深き書冊」としてこれを紹介している⁽⁴²⁾。もう一点が朝河の主著ともいえる『入来文書』⁽⁴³⁾で、これについては一九二九年の坪内逍遙宛書簡で早稲田大学図書館への寄贈について触れている⁽⁴⁴⁾。他にも坪内逍遙に宛てて寄贈した図書がその後大学図書館に収蔵されたものもあり⁽⁴⁵⁾、現在でも寄贈印や朝河からの献辞によってその存在を確認することができる。

そして今回調査を進めるなかで、早稲田大学図書館が朝河から資料を購入したことを示す資料を新たに確認することができた。最初に前述のLC年次報告で触れられていた『幽明日記』と「一五七三年の日付を持つ京都の興味深い資料」の現状について紹介する。

国文学研究資料館が公開する「日本古典籍総合目録データベース」⁽⁴⁶⁾で「幽明日記」を検索すると、唯一早稲田大学所蔵の写本の存在が表示される。すなわち少なくとも現在知られている限りでは「天下の孤本」というわけである。そこで早稲田大学図書館の古典籍総合データベース⁽⁴⁷⁾を確認すると「幽明日記」の書誌と全文の画像情報を見ることができる。それによれば、巻頭に「幽明山人誌」とあり、「台嶺西溪魔訶三毒」、「釈澄源印」等の印が捺された一八二

一年（文政四）から一八四三年（天保十四）まで（一部欠あり）の日誌であることがわかる。内容は正月の「中堂修正会」等からはじまり、日々行われる各種法会や勤行の内容などを中心に、比叡山での日々の生活の様子にも触れるものがあり、江戸時代の天台宗、台密研究にとつて重要な文献と考えられる。朝河は原本を持ち帰らない場合に複製を作成することもあったが、本書については大部であること（全十九冊）、アメリカでは利用が少ないと考えられることを理由に複製は作成しなかった⁴⁸。原本の一冊目の巻頭には「明治四拾年五月六日 購求」の印があるのだが、カード目録を確認すると同月に丸善から購入したとの記録がある。つまりこれについては図書館が直接朝河から購入したのではなく、丸善を通じて受け入れた形になっているのである。丸善は朝河が図書収集に際し購入先として使用した書店であり、⁴⁹そうした関係から朝河の手に渡った資料が丸善を経て早稲田に入ったということになる。

続いて「一五七三年の日付を持つ京都の興味深い資料」だが、これに相当するものが早稲田大学図書館に所蔵されている。すなわち「下京中出入之帳」（一五七三年）がそれである。以下、そのことを資料にしたがって確認してゆく。朝河はLC年次報告の中で、「幽明日記」については複製をつくらなかったが、京都関係資料は複製を作成し、持ち帰ったと述べている。そこでイェール大学のバイネキ稀覯本・手稿図書館の目録⁵⁰を確認すると、*Shinogyo-chu deiri no cho* として一五七三年（元亀四）成立の資料の複製資料（一九〇七年複製）が存在することがわかる。そして複製には朝河の英文のメモ⁵¹が付されており、そこには原本が早稲田大学図書館に所蔵されていること、朝河が原本を京都の古書肆である若林政吉から代価二〇円で入手し、桐箱に保管された原本から直接複製を作成したことなどが記されている⁵²。

朝河が本資料とは別に京都関係の古文書を若林から購入していることはよく知られているが、本資料はそれと同時に若林から入手したが、前述の入手方針にしたがって日本国内に残すこととし、写本を作成して持ち帰ったものと

考えられる。そして今回、本資料の受入に関する早稲田側の資料を確認することができた。

早稲田大学図書館には創設期から今日まで様々な資料が収蔵されているが、その中には図書館の歴史そのものに関する資料も含まれている⁽⁵⁴⁾。本資料の調査にあたり、朝河帰国中の帳票類を確認する過程で以下に掲げる資料を見つげることができた。

○領収書 朝河貫一→早稲田大学図書館 一九〇七年七月一日(図版4)

〈請求記号〉ト一〇 二〇六九 七五(七)

「請求領収書類 明治四〇年」(早稲田大学図書館事務関係書類)のうち

〈形態〉無罫白紙一枚(縦二八・〇×横二〇・〇cm)、

墨書。料紙右端に二箇所綴穴があるので、以前は別の文書とともに綴じられていたことが推測される。

翻刻にあたり、旧字を新字にあらためた。

〈翻刻〉

(割印)「朝河貫式」朱丸印

「収入印紙(三銭)」 証

一 金貳拾円也 元龜四年下京地子根帖

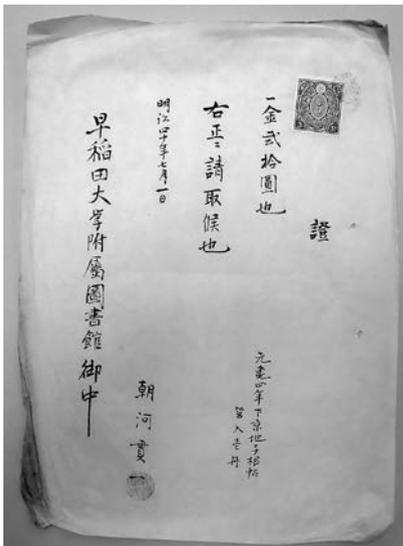
菅入壱冊

右正二請取候也

明治四十年七月一日

朝河貫一「朝河貫式」(朱丸印)

朝河貫一の図書収集と早稲田大学図書館



図版4) 領収書
(朝河貫一→早稲田大学図書館)

一見してわかるとおりイエール大学図書館に複製が存在する資料の原本売却に関する領収書である。金額をみると二〇円とあり、朝河が若林から入手した金額そのまま直接大学に譲渡したことがわかる。こうして受け入れられた資料は「下京中出入之帳」の標題で整理され、利用に供されているが、⁽⁵⁵⁾現物には朝河からの寄贈を示す記述（寄贈印など）は見当たらない。なお本資料は早稲田大学図書館収蔵後に国書刊行会叢書の『続々群書類従』第十六で全文の翻刻が掲載され世に知られるようになった。⁽⁵⁷⁾

朝河との書籍の売買はこれだけにとどまらない。前述の帳票類の中にさらに四枚、朝河との間で交わされた領収書と売却に関する書類を確認することができた。いずれも前に記した「請求領収書類 明治四〇年」（早稲田大学図書館事務関係書類）として一括して管理されているものである（請求記号・ト一〇 二〇六九 七五 七）。以下にその内容を記す。

1. 二種の内容を持つ料紙二枚を仮綴（右肩を虫ピンでとめてある）してある。二枚共に右端に二箇所元の綴じ穴があり、その位置が揃っていることから以前は別文書とともに綴じられていたことが推測される。それぞれの大きさ等と内容は以下のとおり。旧字は新字に改めた。

① 浅河氏へ譲渡シタル書籍代金調（^(ママ)図版5）

料紙は二つ折りにした早稲田大学図書館用箋（半葉の大きさ〓縦二四・二×横一六・二cm、半葉一〇行、青罫、四周子持枠、版心下部に「早稲田大学図書館」とあり）の半葉を使用。墨書。

〈翻刻〉

（罫線枠外右肩に「市島」の朱楷印あり）

金三円式十五銭

アイヌ字典

金拾五円

東国輿地勝覽

金参拾五円

明治財政史

金四円式十銭

仏教いろは字典

金式円参拾銭

続日本高僧伝

金五拾九円七拾五銭

(浅河氏へ譲渡シタル書籍代金調)

② 複写実価 (図版6)

料紙は無罫の白紙一枚。大きさは縦二〇・一×横二

七・五cm。墨書。末尾の印記は文字にかかるように捺してある。

〈翻刻〉

複写実価

南北朝史	三、一三〇	枚数
日本外交史	六、二六〇	一七七
支那史	四、三六〇	三五二
国史学書解題	二、六三〇	二四二
		一四二

朝河貫一の図書収集と早稲田大学図書館



図版5) 浅河氏へ譲渡シタル書籍代金調

≡縦二四・〇×横一六・一cm、半葉一〇行、青罫、四周子持枠、版心下部に「早稲田大学図書館」とあり)の半葉を使用。墨書。「小堅」の楕円印は、小林堅三のものと考えられる。

〈翻刻〉

浅河氏へ譲渡シタル書籍代金調

金三円貳拾五銭

アイヌ字典

金拾五円

東国輿地勝覧

金参拾五円

明治財政史

金四円貳十銭

仏教いろは字典

金貳円参拾銭

続日本高僧伝

×

金五拾九円七拾五銭

四十年七月八日収入差引勘定済「小堅」(朱楕円印)

外金四円

撰陽群談(松山堂抄)の預分をも添加す

②領収書 朝河貫一↓早稲田大学図書館 一九〇七年五月九日

無罫の白紙一枚を二つ折りにしたもの使用。半葉の大きさは縦二八・二×横二〇・〇cm。墨書。料紙半葉の区切りは、で区切った。

〈翻刻〉

(割印「朝河貫一」朱丸印)

朝河貫一の図書収集と早稲田大学図書館

「収入印紙（三銭）」 証

一、金参円貳拾参銭也

南北朝史 壹部

一、金六円貳拾六銭也

日本外交史 同

一、金四円参拾六銭也

支那史 同

一、金貳円六拾参銭也

国史参考書解題 同

一、金壹円〇九銭也

鎌倉時代史 同

一、金四円貳拾参銭也

武家制度 同

一、金拾円五拾七銭也

徳川時代史 三冊 壹部

一、金四拾壹円貳拾六銭也

徳川時代民事慣例集 十一冊
及徳川裁判例 一冊 } 壹部

「朝河貫弍」（朱丸印）

合計金七拾参円六拾参銭也／

「朝河貫弍」（朱丸印）

右正ニ受取候也

明治四十年五月九日

朝河貫一「朝河貫弍」（朱丸印）

早稲田大学附属図書館御中

以上である。資料1、2が相互に関連していることは内容から明らかであり、2②の日付（一九〇七年五月）から、朝

河の第一回帰国時の書類と考えられる。まず、それぞれの①は、いずれも朝河に譲渡した書籍代金ということで、早稲田大学が朝河に書籍を売却した内容となっている。帰国中の朝河が、少なくとも書類上は直接図書館から購入した図書と考えてよいだろう。これらのうちいくつかの書名はイェール大学図書館に所蔵が確認できるが、当該書籍が朝河からの寄贈書か否かについては未詳である。⁽⁵⁸⁾

一方②は、朝河から早稲田に宛てた領収書であり、しかも通常の書籍売却ではなく、「複写実価」とあり、1②には金額に加えてそれぞれの枚数が記されている。試みに各書の複写一枚あたりの単価を確認すると、高いもので「鎌倉時代史」の一枚約二銭、安いもので「徳川時代民事慣例集」不動産四冊・訴訟一冊、及び「徳川訴訟慣例」一冊の合計分に対するもので一枚約一銭二厘程度となっており、各書の単価を平均すると一枚当たり一銭八厘ほどとなる。

ここで想起されるのが、朝河が資料収集にあたり、複製物として写本を作成していたということである。写本作成については、その内容によって二種類に大別できる。⁽⁵⁹⁾一つが前述の「下京中出入帳」や古記録類など、近世以前の原資料、古典籍の写本である。その中には写字生を雇用して作成したものや、当時古記録類の翻刻刊行を進めていた出版社の未刊に終わった原稿類⁽⁶⁰⁾などが含まれる。そしてもう一種が、同時代、すなわち一九〇〇年前後に日本で刊行された書籍等の写本である。なかには朝河の帰国時には未刊で稿本を底本としたと思われる安藤博『徳川幕府県治要略』（赤城書店、一九一五年刊）や白鳥庫吉の講義録などが含まれており、星野恒の『鎌倉時代史』は謄写版で作成された講義録だという。⁽⁶¹⁾②のリストにある資料の複写作成費用が朝河に支払われていることから、領収書の日付である一九〇七年頃に早稲田大学図書館が受け入れた資料の中からこれに相当すると思われるものを探すと、現状では次の資料を確認することができた。⁽⁶²⁾いずれも謄写版印刷（一部を除き標題紙のみ墨書）で袋綴されたものを洋装に製本してあり、巻頭に「明治四拾年二月六日 購求」の印が捺されている。書名は早稲田大学図書館蔵書目録（WINE）の登録名

としたが、巻頭や標題紙がそれと異なる場合がある。そこで、WINEの標題と異なるものについてはそれぞれ補記し、さらに各書の枚数を記した。

書名	請求記号	枚数
南北朝史	リ五 二四四二	一七七枚
標題紙・南北朝史講義		
日本外交史講義	カ五 一二六五	三五六枚*1
巻頭・日本外交史		
支那歴史講義	リ八 二四四三	二四二枚
標題紙・市村鑽次郎述		
支那歴史講義、巻頭・支那史		
国史参考書解題	リ四 六九〇	一四二枚
鎌倉時代史	リ五 二四四一	五四枚
標題紙・鎌倉時代史講義		
徳川時代史	リ五 二四四四(一)~(三)	
標題紙・三上参次述(明治末期に於ける講義)		
徳川時代史		
一(至寛永年間)		三三八枚*2
二(自天保至弘化)		一七五枚
三(朝幕ノ関係)		七〇枚
徳川裁判例目録*3	ワ三 三〇六〇(一)	二六四枚

徳川時代民事慣例集

ワ三 三〇六〇(三)十一。内七欠

三 (動産一) 二八五枚

四 (動産二) 一四四枚

五 (動産三) 二一九枚

六 (動産四) 一七一枚

八 (不動産二) 二九七枚

九 (不動産三) 四〇八枚

一〇 (不動産四) 一二四枚

十一 (訴訟) *4 二二五枚

徳川裁判例

ワ三 三〇六一 一三三枚

*1 附録として本文中に挿入されている五枚を含む。

*2 前付二枚を含む

*3 冒頭に凡例、目録を収載。本文は「人事」からはじまっており、「民事慣例集」の人事編第一冊と思われる。

われる。

*4 標題紙「徳川裁判例 訴訟之部」

以上のように一部欠落があるが、朝河宛領収書②にあるものと書名、枚数ともおおむね一致することがわかる。資料現物に朝河からの購入を示す文言は記されていないが、これらの謄写版資料は早稲田大学図書館が朝河から購入したものと考えて間違いあるまい。⁶³⁾ すなわち朝河が写字生を用いて書写し、謄写版によって複数冊作成したものの中心

は、早稲田大学図書館が購入し、受け入れていたものが含まれていると考えてよいだろう。⁽⁶⁴⁾ おそらくこれらの資料以外にも、逍遙経由も含めて朝河から寄贈された資料や、朝河から直接、あるいは朝河の仲介によって購入した資料があると思われるが、今後さらに精査することであきらかにしてゆきたい。

ここまで早稲田大学図書館に残された朝河関係の帳票や、図書館蔵書によって、朝河の収書活動と早稲田大学図書館との接点を見てきた。最後に早稲田大学図書館長として、さらには国書刊行会の責任者として朝河と交渉した市島春城の日誌などから、朝河との関係をあらためて確認しておく。

5. 「春城日誌」における朝河貫一に関する記載と国書刊行会

生涯にわたり綴った日誌の中で、市島は直接、さらには書簡を通じた人々との往来をかなり細かく記している。そこで市島の図書館長在任中の日誌から、朝河貫一との関係を示す記述を探すと、これまで触れたものも含めて以下のとおりである。

① 一九〇六年（明治三九）二月十九日

校友朝川貫一⁽⁵⁷⁾洋行中の処帰朝、本日会談す、

② 同年三月二〇日

早朝、朝河貫一、図書蒐集の件ニ付来話、

③ 同年三月二四日

朝河貫一に書状を投す、

④ 同年七月二五日

京都発朝河貫一の書ニ接す、

⑤ 一九〇七年（明治四〇）二月八日

晴、（中略）参館事務を処す、朝河貫一に刊行会所蔵記録類を譲る件、（中略）を話す、

⑥ 同年二月二十八日

朝河貫一より写本代四百五十円領掌、

⑦ 同年六月二十四日

今夜、富士見軒ニ於て姉崎正治、坪谷善四郎、朝河貫一、三瀧信三、山崎直三、原口竹二郎の洋行を送る為、宴会を開く、余も出席す、⁽⁶⁵⁾

⑧ 同年一〇月十四日

在米国朝河貫一より二通の書状到達、

⑨ 同年十一月五日

在米朝河貫一より来信あり、

⑩ 一九〇八年（明治四二）九月二六日

在米国朝河貫一の書ニ接す、

⑪ 同年十一月七日

在米国朝河貫一の書ニ接す、

⑫ 一九〇九年（明治四三）六月二二日

在米エール、朝川貫一⁽⁶⁶⁾より刊行会出版物を、エール大学へ通送すべき旨来翰あり、

⑬ 一九一一年（明治四四）一月二七日

在米国朝河貫一より来状あり、

⑭ 一九一三年（大正二）一月十六日

在米朝河貫一より来書あり、

⑮ 同年三月二四日

在米国朝河貫一二夫人死去之悔状を發す、

⑯ 同年五月二二日

朝河貫一より来状あり、

⑰ 一九一七年（大正六）九月三日

在伊豆長岡朝河貫一より来書、

⑱ 同年九月五日

在伊豆長岡朝河貫一より余の図書館長退任ニ対し、慰問の書状を寄せ来りたるにつき一書を發す、

以上、第一回の帰国直後の会談から始まり、朝河に関する記述を十八件確認できた。このうち、ここまで触れてきた内容に関するものを見てゆくと①②は帰国直後の収書に関する相談であり、⑧は文庫協会とALLAの交流に関する書簡である。二通とあるのが前述の『図書館雑誌』に掲載された市島宛書簡と、それに同封されてきた朝河宛のワイヤーの書簡だと考えられる。さらに⑰⑱は今回紹介した一九一七年（大正六）八月三〇日付の市島宛書簡と、その返信について書いたものである。それ以外で目を引くのは図書収集に関連すると思われる⑤⑥⑫であろう。まず⑫は国書刊行会の出版物、すなわち『国書刊行会叢書』をイェール大学宛送ってほしいとの依頼が朝河から市島にあったという

のである。実はこの半年ほど前の前年十一月、市島から朝河に宛てて刊行会の書籍送付について書簡が送られている。⁽⁶⁶⁾ それによれば、市島はまず朝河から送本料として送られた五円五錢（二ドル五〇セント）について刊行会事務所に渡したと述べ、一回の送本料として平均五〇銭かかるので、第三年度十二回分の送料には六円が必要だとしている。⁽⁶⁷⁾ さらに十三回目以降の刊行分について朝河がイェール大学の分を丸善に注文したとの連絡があったが、丸善からイェール分として刊行会への申込が来ていないことを告げている。刊行会叢書の送本について朝河（イェール大学図書館）と刊行会、さらには丸善との間で何らかの行き違いがあったようで、そうした状況を経て、⁽⁶⁸⁾ ⑫にあるように朝河からあらためて市島に宛てて送本依頼があったものと思われる。

⑤も刊行会関係だとわかるが具体的な内容は検討が必要である。まず「刊行会所蔵記録類」が何を指すかだが、この時期に朝河に譲ると言っている以上、朝河の収書対象となるような何らかの図書、資料類と推測される。そこで考えたのが『国書刊行会叢書』中の『統々群書類従』第五冊「記録部」との関係である。ここには「三代御記」「貞信公記」「九曆」など古代の古記録にはじまり、「天正日記」「九州下向記」など戦国・織豊期までの記録類が収められている。ただ本書が刊行されるのは一九〇九年十月であり、⑤の段階では刊本そのものについて朝河への譲渡が検討されたものではない。しかし『統々群書類従』に収載する資料の選定がすでに始まっていたとすれば、あるいは検討の過程で収集した資料や作成した写本のうち、何らかの事情で刊行会として不要となった「記録類」⁽⁶⁹⁾ をまとめて朝河に譲渡することを検討したとも考えられるが、今後イェール大学所蔵資料などとあわせて調査することで、詳細が判明するものと思われる。

最後に⑥だが、朝河から市島が写本代金を受け取ったというのである。朝河の写本作成の過程で早稲田大学図書館がその成果物を購入したことは前述のとおりだが、ここでは朝河が写本を購入している。これはいつたいどのような

事情が考えられるであろうか。まずここでいう「写本代」については二つの場合が想定できよう。一つが一枚の単価を決めて作成した写本を購入した場合で、この場合、市島個人が作成した写本ではなく、おそらく国書刊行会による写本であろう。国書刊行会では叢書刊行に向けて各種古典籍、古記録、古文書等の写本作成をおこなっており、それらのうち、すでに刊本が出版されたものなど、何らかの理由で不要となったものを朝河に売却した可能性である。ただこの場合、一枚の単価を前述と同様約二銭程度と想定すると二万枚以上になり、一冊二〇〇丁として一〇〇冊以上の写本が売却された計算になる。もちろん一枚の単価がより高額であれば冊数はより少なくなるが、いずれにしてもまとまった数の写本が朝河に売却されたことになる。あるいはもう一つの可能性、すなわち単純に市島が自身の手元にあつた写本類を売却した可能性も考える必要がある。⁽⁷⁰⁾ いずれにしても市島経由での朝河の収書活動については未詳の部分が多く、今後さらに調査を進めてゆく必要がある。

おわりに

冒頭に述べたように、現在朝河貫一による日本語図書収集に関する研究は大きな進展をみせている。本稿では、早稲田大学、市島春城の視点からその問題について検討を加えてきた。日誌、書簡など周辺資料から見えてきたのは、朝河の収書活動に市島を中心とした早稲田大学図書館が深くかかわっていた事実である。ただ不明な点も数多く残っている。今後、周辺諸資料の調査を進めることで朝河と早稲田、市島の関係をより明確なものとしてゆきたいと考えている。大方のご教示を賜われれば幸いである。

なお本稿は、早稲田大学教授の甚野尚志先生に、同大学歴史館での展示「海を渡ったサムライ 朝河貫一展」の資料調査にお誘いいただき、その内容を朝河貫一学術協会第八回研究会（二〇二〇年二月二六日、於早稲田大学戸山キャン

パス)で報告したものの一部をまとめたものである。甚野先生や研究会席上でご意見を頂戴した諸氏に、あらためて御礼申し上げます。

注

- (1) ①近藤成一「イェール大学の所蔵する日本関連資料について」(東京大学史料編纂所編『イェール大学所蔵日本関連資料 研究と目録』勉誠出版、二〇一六年)、②中村治子「朝河貫一とイェール大学日本語コレクション 構築・目録作成・整理の葛藤」(海老澤衷ほか編『朝河貫一と日欧中世史研究』、吉川弘文館、二〇一七年)など、多くの論稿が発表されている。
- (2) 杉森哲也「京都古文書」目録」(東京大学史料編纂所編『イェール大学所蔵日本関連資料 研究と目録』、勉誠出版、二〇一六年)。
- (3) ①松谷有美子「朝河貫一によるイェール大学図書館および米国議会図書館のための日本資料の収集」(『Library and Information Science』七二、二〇一四年)、②同「朝河貫一と日本図書館協会」(海老澤衷ほか編『朝河貫一と人文学の形成』、吉川弘文館、二〇一九年)、③同「イェール大学図書館長書簡類にみる朝河貫一の日本資料収集」(『三田図書館・情報学会研究大会発表論文集』二〇一九年度、二〇一九年)など。
- (4) 朝河貫一書簡集編集委員会編、早稲田大学出版部、一九九一年。
- (5) 以下、朝河の履歴については前掲注(3)①松谷論文、および前掲注(4)書などを参照した。
- (6) 市島春城「数年にして文界の一名物」(『随筆早稲田』、翰墨同好会・南有書院、一九三五年)、引用中のくは中略、()は原文のまま。
- (7) 学位論文原題・“The reform of 645: an introduction to the study of the origin of Feudalism in Japan.” 同論文は翌年、“The early institutional life of Japan: a study in the reform of 645 A.D.”の書名で、秀英舎から刊行された。
- (8) 前掲注(1)①近藤論文、および後掲注(2)イェール大学図書館長年次報告など参照。
- (9) 以下、両図書館長の年次報告書および、前掲注(3)①松谷論文を主に参照した。

- (10) Putnam, George Herbert, 1861-1955。第八代 LC 館長（在任・一八九九～一九三九）。議会図書館分類表、同伴名表の採用、印刷カードの配布など現在につながる重要な図書館施策を実現した。日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典』第三版（丸善、二〇〇七年）参照。
- (11) Library of Congress, "REPORT OF THE LIBRARIAN OF CONGRESS, 1907", Government Printing Office, Washington, 1907。本稿では habitrust 収載のハーバート大学所蔵本を参照した。
- (12) Yale University, "REPORT OF THE LIBRARIAN, July 1, 1907-June 30, 1908, 1907-1908", BULLETIN OF YALE UNIVERSITY, 4th Series, No.9, Aug. 1908, なお、後述するように本書の早稲田大学図書館所蔵本は朝河から寄贈されたものがある。
- (13) 前掲注(6)①参照。
- (14) 「春城日誌 明治三十九年第一月以降」（早稲田大学図書館所蔵市島春城資料 五四四）。翻刻が『早稲田大学図書館紀要』三三（春城日誌研究会編、同館刊、一九九一年）に収載されているが、本稿ではそれを参照しつつ、原本に拠った。市島春城資料（以下単に「春城資料」とする）は早稲田大学図書館が所蔵する市島自筆の日誌、筆録を中心とした資料群である。詳細は後掲注(18)拙稿参照。
- (15) 春城は生涯にわたり日誌と、日々感じたことをまとめた筆録類を残しているが、書簡の往来や来客については人名だけのこともある程度詳しく記している。朝河が日本資料の収集を考えはじめたとされる一九〇五年頃の市島の日誌や筆録に朝河についての記載は見当たらない。
- (16) 「春城日誌 明治三十九年第一月以降」（前掲注(14)）参照。
- (17) 「廿五年紀念早稲田大学創業録」（早稲田大学出版部、一九〇七年）。
- (18) 図書館長就任までの市島やその後の活動については①拙稿「解説と解題」（『市島春城随筆集』十一、クレス出版、一九九六年）、②同「翻刻解題市島春城「自叙伝材料録 一～五」（『早稲田大学図書館紀要』六四～六七、二〇一七～二〇二〇年）参照。
- (19) 当時の東京専門学校は校長である鳩山和夫のもと、学監として高田早苗が実務を統括していたが、高田から図書館長就任を依頼された市島はのちに「喜んで直ちに諾したが、実は其頃まだ図書館の管理法や西洋流の目録の編成法などを心得てゐなかつた。しかし初めから興味を以つて事に當つた」（市島春城「早稲田大学の今昔」図書館の建設『随筆早稲田』、翰墨同好会、

南有書院、一九三五年」と述べており、ただちに承諾する気持ちがあつたことがわかる。

(20) 「春城日誌 明治三十五年三月六日以降」(春城資料 五三六)。大橋図書館は出版社博文館の大橋佐平が開設を目指していた私設図書館で、佐平の死後、息子の新太郎がその遺志を継ぎ、一九〇二年六月十五日に開館していた。岸上は図書館副主事として市島の対応をした。「大橋図書館四十年史」(博文館、一九四二年)。

(21) 「春城日誌」(前掲注(20))、および「我楽多誌 五」(春城資料: 一一〇)。

(22) 「日本図書館協会沿革略」(『図書館雑誌』三〇)、日本図書館協会、一九一七年)。

(23) 「早稲田学報」一三七(一九〇六年八月)の「早稲田記事」次年度嘱託講師の項に「英語 ドクトル、オヴ、フィロソフイー 朝河貫一」とある。また図書館に残された当時の事務記録である「要件録」(図書館庶務掛、請求記号・ト一〇 二〇六九 三(一))には「明治三十九年九月十四日 左ノ通り本部ヨリ通牒(中略) 本学年嘱託講師左ノ通り(中略) 実際英語 ドクトル オフ、フィロソフイー 朝河貫一」とある。

(24) 「早稲田学報」一四八(一九〇七年六月)に掲げられた同年五月制定の「早稲田大学定款」によれば教授会は各部の講師から総長・学長により嘱任されることとなっていた。第一回教授会は五月十六日に開催され、朝河も出席している。

(25) 「日本文庫協会紀要」(『図書館雑誌』一、一九〇七年)。名簿には「在外海員」とあるが、同誌の別項に「在外会員」とあるのでそちらの表記を採った。また講演をおこなった日の夜には「米国議院文庫及エール大学図書館の依頼を受けて本邦書籍蒐集の事を畢へ不日帰米せんとする朝河貫一」(前掲注(22))らのために市島が中心となって祝宴が開かれ、国内の主要図書館関係者がこれに参加しているが、こうした機会が朝河にとってはその後の日本研究、資料収集に重要な場となつたと考えてよいだろう。朝河と日本図書館協会との関係については前掲注(3)②参照。

(26) 「日本文庫協会紀要」日本文庫協会主催第二回全国図書館員大会記事(『図書館雑誌』二、一九〇八年)。同紀要の別項目では、朝河がアメリカ図書館協会(ALA)に日本文庫協会との間で出版物や図書館問題に関する情報交換を申し入れたことに対する「ALA幹事」ワイヤー(J. I. Weyer)の回答文(朝河宛書簡)が、朝河が市島に宛てた書簡とともに掲載されている。ワイヤーは一九〇二年から一九〇九年までALAの elected-secretaryであり、一九一〇年から十一年には会長となつてゐる(“Dictionary of American library biography”, Libraries Unlimited, 1978. ALA ホームページ“ALA's Past Presidents”, <http://www.ala.org>)

/about:history/past)。

- (27) 前掲注(12)書。早稲田大学中央図書館に朝河寄贈の同書が収蔵されている(請求記号・ZC 四七六 一九〇七)。
- (28) ①日本図書館文化史研究会編『図書館人物事典』、日外アソシエーツ、二〇一七年)、②『早稲田大学図書館史 資料と写真で見える100年』(早稲田大学図書館編刊、一九九〇年)。なお③『早稲田学報』一五三(早稲田記念号、一九〇七年)の「早稲田大学開校前ヨリ勤続ノ職員」に「石井藤次郎」とあるが、藤五郎の誤りと考えられる。石井はこの後も図書館に勤務し、一九二五年の新図書館(現在の早稲田大学二号館)開館の直前に死去した。
- (29) 前掲注(22)。
- (30) 前掲注(28)①②参照。一九〇〇年の職務章程改正により「東京専門学校図書館」となった。加藤は早稲田だけでなく、東京帝国大学法学部、政法大学などの図書館にも勤務した。
- (31) 前掲注(28)①。市島の日誌の一九〇四年五月八日条に「小林賢三^{マユ}再来、来る十一日より図書館二備人之事決す。」(『春城日誌 明治三十七年一月以降』(春城資料: 五四〇)とある。小林はこれ以前からたびたび市島のもとを訪れて身の回りの手伝いをしていたが、この段階で正式に図書館職員として採用が決まったようである。金子宏二「早稲田大学越佐会群像」九(『新潟日報』二〇一二年五月二三日号)。
- (32) 拙稿「翻刻解題 市島春城「自叙伝材料録 四、五」(『早稲田大学図書館紀要』六七、二〇二〇年)。市島の父・直太郎の弟で和泉家の婿養子となった巖吉は市島を物心両面から支えていたが、市島が館長となった一九〇二年に死去している。
- (33) ここで郵便物の宛先となっている人々について確認しておく。
- 下田歌子(一八五四―一九三六) 明治から昭和にかけて活動した教育者。華族女学校教授や帝国婦人協会の結成など女子教育に尽力、一八九九年に実践女学校(現・実践女子大学)を開設したことでも知られる。上沼八郎「下田歌子」(『国史大辞典』JapanKnowledge 版、20201012) 参照。朝河貫一との関係は未詳。
- 岡田五兎 朝河の福島尋常中学時代の恩師。前掲注(4)書参照。
- 寛舜亮(一八八四―一九三八) 福島県出身の教育者、山形県立酒田中学初代校長。仙台の第二高等学校を経て、一九一一年に東京帝国大学を卒業しているので、このときの朝河からの葉書は学生時代の宛に送られたことになる。田村寛三「校風樹

立した酒田中学初代校長」(荘内日報社『郷土の先人・先覚』一四六、同社ホームページ掲載、<http://www.shonai-nippo.co.jp/square/feature/exploit/exp146.html>)、『新編 庄内人名辞典』(同書刊行会、一九八六年)。

東亜同文会＝一九八八年に結成された日本の大陸政策にかかわる民間団体。その活動は大隈内閣の対中政策と関連した部分もあるが、朝河との接点は未詳。平野謙一郎「東亜同文会」(『国史大辞典』、吉川弘文館、JapanKnowledge 版、20201012) 参照。
Chinese Young Men's Christian Association ＝一九〇六年に発会した「留日中華基督教青年会」のこと。当時増加していた清国からの留学生のための組織で、早稲田に作られた寄宿舎は後に早稲田大学 Y M C A の「信愛学舎」となった。奈良常五郎『日本 Y M C A 史』(日本 Y M C A 同盟出版部、一九五九年) 参照。

Bryn Mawr College ＝プリンマー大学は一九八五年にクエーカー教徒によってアメリカのペンシルベニア州プリンマーに設立された女子大学。同校ホームページ参照 (<https://www.brynmawr.edu/about>)。

(34) 前掲注(4) 書収載「朝河貫一年譜」参照。

(35) ①市島春城「国書刊行会の思出」(『春城随筆 余生児戯』、富山房、一九三九年)、②同「第一期刊行顛末」(『国書刊行会出版目録 附日本古刻書史』(国書刊行会、一九〇九年)。

(36) 福島県立図書館に残る国書刊行会から朝河宛の書簡からもそのことがわかる。甚野尚志・福島県立図書館編『福島県立図書館所蔵朝河貫「資料目録」改訂版(福島県立図書館、二〇一九年)』によれば同館には国書刊行会から朝河宛の書簡八通が所蔵されており、その内容は送本やその代金に関する連絡である。

(37) 前掲注(34) 参照。

(38) 一九一七年(大正六)に早稲田大学内でおこった紛争。学長である天野為之を中心とする勢力と、高田早苗、市島春城らが対立、学生、教員を巻き込み、新聞紙上でも大きく取り上げられる一大騒動となった。最終的には天野が学長を辞任して大学を去るかたちで決着するが、高田、市島も学内の要職を辞することとなった。当時学生であった尾崎士郎(一八九八―一九六四)が『人生劇場』の中で描いたことでも知られている。早稲田大学史編集所編『早稲田大学百年史』二(早稲田大学出版部、一九八一年) 参照。

(39) 「双魚堂日誌」一九一七年九月五日条に「在伊豆長岡朝河貫一より余の図書館長退任ニ対し、慰問の書状を寄せ来りたるに」

き一書を発す」との記載がある（春城資料：五七三）。

- (40) 逍遙と朝河の關係、さらには両者の間で交わされた書簡については、①拙稿「坪内逍遙と朝河貫一 書簡を通じて見た学問上の交流」（『日本史攷究』四四、二〇二〇年）、②甚野尚志・藤原秀之「早稲田大学歴史館「海を渡ったサムライ 朝河貫一展」によせて 新発見資料の紹介」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』六六、二〇二一年）参照。

- (41) Houghton Mifflin and Company, Boston and New York, 1904. 朝河からの寄贈本が早稲田大学中央図書館に收藏されている（請求記号、A E 一四四〇）。見返しには朝河の自筆で“With its compliments of K. Asakawa Waseda Univ. Library.”（イタリック部分は印刷）と記された名刺が貼付されており、標題紙に捺された寄贈印には「明治卅八年一月十二日 在米国 著者氏寄贈」と記されている。朝河は日露戦争中に刊行した本書について後に「教授と研学とは余の本務にして、時事を評論するは余のよくせざるところのみならず、また好まざるところなり。しかれども重要な時事に関して誰人か為さざるべからざること未だ誰人も容易に為さざるを見て、自ら揣らず、戦時一書を英米両国にて出版したることあり」と述べている。朝河貫一『日本の禍機』序文（実業之日本社、一九〇九年）。引用は講談社学術文庫版（一九八七年）によった。『日本之禍機』出版の経緯については、前掲注(40)②論文参照。

- (42) 『早稲田学報』一一五（一九〇五年三月）。

- (43) “The Documents of Iniki”, Yale Univ. Press, 1929, Yale historical publications, Manuscripts and edited texts, 10.（請求記号・A E 三二二七）。図書館蔵本の見返しには「早稲田大学図書館御中 朝河貫一」と自筆の献辞が添えられており、本文扉には昭和四年五月十四日付で朝河から寄贈された旨の寄贈印が図書館によって捺されている。

- (44) 坪内逍遙宛朝河貫一書簡 一九二九年七月二〇日（早稲田大学演劇博物館所蔵）。この書簡で朝河は入来文書寄贈について「部数少く印刷費多く定価高く候、先度早稲田大学の図書館に一部呈上仕候間（中略）日本の図書館へは此外に何れも小生より寄贈せず、寄贈する資力なく候」と述べている。詳細は前掲注(40)①拙稿参照。

- (45) 前掲注(40)①拙稿参照。

- (46) <https://basel.nijiac.jp/~tkoten/>

- (47) <https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>

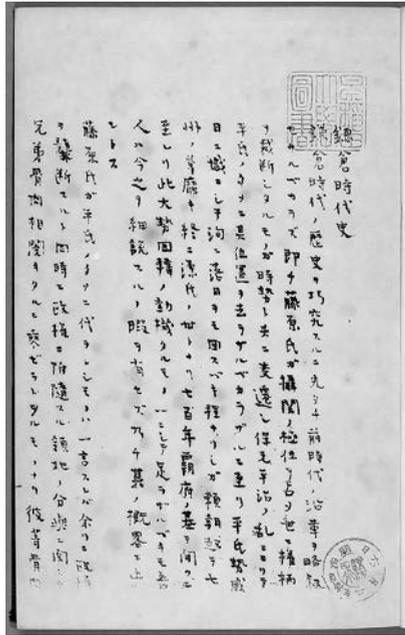
- (48) LCの報告書には“so voluminous and would be of so little use in America”と理由を述べている。前掲注(11)参照。
- (49) 前掲注(1)②参照。
- (50) <https://beineckelibrary.yale.edu/>
- (51) 朝河が早稲田大学図書館で一九〇七年五月二四日に記したものを。全体がタイプ打で朝河の署名と修正部分が黒のペン書である (<https://brbl-dl.library.yale.edu/vuinfo/Record/3684510>)。
- (52) 本写本の存在についてはイェール大学図書館の中村治子氏にご教示いただいた。
- (53) 朝尾直弘「朝河貫一と下京文書」(『日本史研究』二四一、一九八二年)、前掲注(2)参照。
- (54) 東京専門学校時代から近年までの帳票類、業務日誌、寄贈図書受入目録、展覧会記録などのすべてが残っているわけではないが、現存する資料は一図書館の記録としてはもちろん、大学史、近代図書館史研究上も重要な資料群である。今回紹介した資料は「早稲田大学図書館事務関係書類」(ト一〇二二〇六九)のうち、「請求領収書類 明治四〇年」としてまとめられたものの中に含まれている。
- (55) 請求記号・タ四 二六一八(貴重書扱)。古典籍総合データベースで全文の画像を見ることができ。
- (56) 国書刊行会、一九〇九年。
- (57) その後、誤字などを修正したものが『早稲田大学図書館紀要』十四(一九七三年)に収録された。柴辻俊六「本館所蔵 古書摘録」三(同誌)。
- (58) イェール大学図書館のオンライン目録(OPAC)によれば、ここに挙がっている図書のうち『仏教いろは字典』(若原敬経編述、其中堂書店、一九〇四年)、『続日本高僧伝』(道契撰、吉川半七、一九〇六年)、『明治財政史 一名松方伯財政事歴』(同書編纂会、丸善、一九〇四―一九〇五年)の存在は確認できるが、朝河からの寄贈については未詳。
- (59) 前掲注(1)①②等参照。
- (60) 朝河の収集した資料の中には哲学書院の印がある謄写本が含まれている。哲学書院は一八九八年に藤原頼長の日記『台記』を刊行、多くの古記録類の刊行を予定していたが、未刊に終わった。それら未刊に終わった原稿が朝河の手に渡ったと考えられている。前掲注(1)①参照。

(61) 前掲注(1)②参照。

(62) これら謄写版をはじめ、資料閲覧にあたっては早稲田大学図書館特別資料室の寫田修氏の手を煩わせた。ここに特に記して御礼申し上げるものである。

(63) 一部の資料にペンによる書き込みがある。書簡等の字体と類似するものがあり、あるいは朝河の手になるものが含まれてい
るのではないかと推測される。

(64) このうち『鎌倉時代史』については中村が「日本国内で所蔵がある図書館は未だに確認されていない」と指摘するものと同
一のものではないだろうか。だとすれば国内で初めての発見ということになる。前掲注(1)②参照。(図版7)



図版7) 『鎌倉時代史』巻頭

(65) 『早稲田学報』

一五〇号(一九〇七年八月)に「講師校友送別会」として、「六月二十四日午後五時より、麹町区富士見町富士見軒に於て、講師姉崎正治(学術取調の為め洋行)三瀧信三(本大学留学生)、山崎直三(本大学留学生)、校友朝河貫一(エー

ル大学へ帰任)、坪谷善四郎(欧米漫遊)、原口竹次郎(米国ハートフォード大学へ入学)の六氏の為め、送別会を開く、」とある。

(66) 朝河貫一宛市島謙吉書簡 一九〇八年十一月十三日(福島県立図書館所蔵朝河貫一資料 B十五―一)。書簡の内容については甚野尚志先生にご提供いただいた複写により確認した。

(67) 事前に申し込んだ会員に向けて一九〇五年十一月に配本を開始した『国書刊行会叢書』は当初三年計画で刊行されることとなっていたが、実際には刊行は四年目以降にも及んでいる。前掲注(35)②参照。

(68) こののち刊行会から朝河に宛てて刊行会叢書送本について送本分の受領確認や送料についてなど、たびたび書簡が送られている。前掲注(36)。

(69) 国書刊行会では原稿として新たな写本を作成する場合と、既存の版本、写本をそのまま翻刻の底本とする場合がある。刊行後不要となったそれらの「原稿類」の一部が現在早稲田大学図書館に所蔵されている。刊本への収載が見送りとなったもの、また同一資料で複数の写本、版本を刊行会が入手した場合など、刊行前、あるいは原稿完成以前に不要となるものが存在したことも考えられる。

(70) 市島は早稲田大学図書館長就任時に、自身の蔵書の一部を図書館蔵書としているが、その経緯をみると実質的に売却したものである。また一九一七年には新居購入にあたり、その費用を蔵書売却により捻出、さらに晩年には蔵書の多くを売り立てている。拙稿「翻刻解題 市島春城「自叙伝材料録 三」(『早稲田大学図書館紀要』六六、二〇一九年)参照。あるいは日付の近い⑤⑥を一連のものと考え、「記録類」の代金として四五〇円を受けとったとも考えられるが、推測の域を出るものではない。

(ふじわら ひでゆき 教育学部非常勤講師)